

令和4年度 奈良市立左京こども園 研究実践概要

園長名 阿部 靖子

全園児数 123名

1. 研究主題 心豊かに生き生きと活動する子どもの育成
— 気づきや発想を大切にする保育を目指して —

2. 研究年度 2年度

3. 研究主題設定理由

子どもは遊びを楽しみ夢中になり、充実していく中で豊かな経験を積み重ねていくと考える。豊かな経験から生き生きと活動する子どもを育みたい。

子どもたちが主体的に遊び、「もっとしたい」「どうなっているんだろう」と好奇心や探究心を育めるような環境構成や援助を探りたいと考え研究主題を設定した。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

子どもたちが主体的に遊びをつくりだし、「もっとしたい」という意欲をもって継続的に遊びを進めていける子どもを育む。

②研究の重点

子どもの発達、成長に応じた取り組みを行い、一人一人の内面に寄り添い、「どうなっているんだろう」「やってみたい」「もっとしたい」など、子どもの好奇心や探究心を育めるよう環境を整え子どもの発想を活かした保育を実践していく。

③活動の方法

- ・園内研究会を実施し、多面的に振り返る場をもつ。
- ・日々の保育の振り返りを行い、子ども理解と職員間の共通理解のための機会をもつ。
- ・子どもたちの「やってみたい」「もっとしたい」思いを受け止め、意欲的に遊ぶ環境構成や援助を探る。

[3歳児] 「中に入ってみて」 [11月] 援助 環境構成

散歩で拾い集めたドングリを使って、園庭でドングリ転がしをして遊んでいる。波板をワゴンに立てかけてドングリを上からたくさん転がして遊ぶことを楽しんでいる。この日は、波板の下に子どもたちが入れようようにシートを敷いた。転がし遊びをしていたA児が中に入り、「ドングリころがして」と一緒に遊んでいたB児に言うと、B児はドングリを手にとりたくさん持って波板の上からドングリを流した。ゴロゴロ～と音が鳴ると「きゃ～！」と嬉しそうに笑い合うA児とB児。交代しながら繰り返し遊んでいたが、手でドングリを持っていたA児は、近くにミルク缶があることに気が付いた。A児はミルク缶に半分くらいまでドングリを入れ、一気に波板に流した。今までより大きな音でドングリが転がったので、中に入ってい

子どもの気づき・
発想のポイント

いつもと違う様子に気が付き、中に入ってみようとした。



ミルク缶のほうがたくさんドングリを入れることができることを考えた。

たB児と一緒に「わあー！めっちゃすごいなあ！」と驚いたり喜んだりしている。A児が「先生も中に入れてみて」と保育者を誘い、中に入るように伝えた。2人はドングリをミルク缶に入れ始める。「まだかなー？」と保育者が尋ねると、「まだー！」と顔を見合わせながら笑うA児とB児。ミルク缶いっぱいに入ると「いきますよー！」と一気に波板にドングリを流し、保育者が「きゃー！」と驚く様子を見て、A児とB児はさらに興奮した様子で嬉しそうに笑い合った。その後も他の友達や保育者を誘って繰り返し遊びを楽しんでいた。

ドングリをたくさん転がすと大きい音がすることに気が付いた。

保育者が驚くように、もっと大きい音を出そうと考え、ミルク缶いっぱいに入れた。

(評価)

散歩で拾い集めたドングリを遊びに取り入れたことで、子どもたちが興味をもって遊びに取り組む姿が見られた。日頃から転がし遊びを楽しむ姿はあったが、中に入ることができるように環境を用意したことで、さらに遊びが広がるきっかけになった。転がし遊びを楽しみながら、ドングリの量で音の大きさが変化することやどうしたらたくさんのドングリを転がすことができるのかなど、自分で考えたり試したりする姿が見られた。側で見守りながら、友達と一緒にイメージしたり遊びを共有したりする姿を認め、さらに関わりが広がるように関わっていきたい。

[4歳児] 「回転ずしにしたい！」 [10月] 援助 環境構成

子どもの気付き・発想のポイント

製作コーナーで、白い画用紙を丸めて酢飯に見立て、色画用紙でネタをつかってお寿司をつくる子どもがいた。周りの子どもも興味をもち、「お寿司つくりたい」とのことで、果物の梱包材を製作の材料として出すと、お寿司づくりを楽しむ姿があった。段ボールを丸く切ったものを皿に見立てていたので、十分に使えるように数を増やした。お寿司屋さんがはじまったが、なかなかお客さんが来ず、遊びが終わる。振り返りで、どうすればいいかと問いかけると、「回転ずしにしたらいいinchやう?」「磁石でお皿を動かそう」などの意見が出た。子どものアイデアを実現できるよう、磁石と半透明の段ボールの板を用意しておく。

友達のつくったお寿司をみて、本物みたいな形のお寿司の作り方に気付く。



磁石が引き合う力を、回転ずしの仕組みに使えるのではと考え、やってみる。

翌日、必要なものを出しておく、磁石のアイデアを持っていた子が段ボールの皿の裏に磁石を貼り、板の下から磁石の引き合う力をつけてお皿を動かす。見ていた周りの子どもも「すごい！やってみよう！」と真似してやってみる。最初は磁石の裏表が分からず、うまくいかなくて「せんせい、どうやんの?」ときくので、「友達に聞いてみたら?」と促すと、友達にききながら、磁石の裏表や皿の裏の磁石にぴったり合わせるなどコツがわかるとうまく動かせるようになり、喜んで動かしていた。「何にしますか?」「まぐろがいいです」などやりとりをしながら、お寿司屋さんを楽しんでいた。

磁石の向きによって引き合わないことや、ぴったり合わせることで動かせることに気づく。

(評価)

・友達のつくったものに興味をもった子どもの姿から、使いやすい素材を新しく出すこ

- とで、周りの子どもも自分の好きな寿司を考えてつくる姿があった。
- ・うまくいかなかったことを振り返りで問いかけることで新たなアイデアが出て、遊び方が広がった。
 - ・友達同士で教え合えるように促していくことで、自分たちで遊びを進め、やりとりを楽しみながら遊ぶ姿につながった。
 - ・磁石という新しい用具とその使い方のコツに気付き、磁石の引き合う力の不思議さや動かすおもしろさを感じながら遊ぶことができた。

[5歳児] 「氷つくりたい」 [12月] 援助 環境構成

子どもの気付き・
発想のポイント

12月に入り、急に寒くなったことで、タライに水を入れておくと氷ができていた。「先生、見て。氷。めっちゃ冷たい」と嬉しそうに友達や保育者に見せていた。友達の声を聞いて、保育室に入っていた友達も廊下に出てきた。「あっちにもあったで。青いシートのところに」と氷があった場所を友達に知らせていた。「なあなあ、氷作ろう」と友達を誘い掛け、「つくりたい」と共感した。「先生、たまごパックない？」保育者が保育室にあることを伝えると、「Bちゃん、探しに行こう」と2人で保育室に探しにいった。「ここに水入れて、ドングリ入れよう」「いいね。そうしよう。」「先生、ドングリ入れていい？」と友達と話しながら、氷づくりに意欲的になっていた。保育者は子どものやってみたい思いをくみ取り、見守ることにした。水を入れたものをおけるように保育室の前に机を準備しておくと、水を入れた卵パックを並べていた。朝の準備を終えた友達も「やりたい。それどこにあったん？」と友達に聞き、「どングりは？」「先生これ使っていい？」と水を入れられそうなカップをいろいろと自分たちで準備し、持ってきた。「触られないように。紙に書いておこう」と話す。後から氷づくりをしていた子も同じように紙に書いて、机に並べていた。「早く氷にならないかな」と言い、楽しみにしていたので、保育者も子どもの思いに共感し、「早く、氷になるといいね」と話した。

外の水が凍っているなら、氷が作れるのではないかと考えた。



水を入れられそうなものを自分なりに考え、準備しようとする。

つくった物を触られないようにするために今まで、経験したことを思い出し自分たちで考えてする。



(評価)

子どもが冬の自然現象に興味をもてるように事前に準備しておいたことで、自分たちで必要な物を準備する様子が見られたり、友達と相談しながら進めたりしている様子が見られた。保育者は子どもの思いや発想を受け止め共感していくことで、興味をもったことに取り組むことができると実感した。凍ることを楽しみにし、期待をもったことことから、場所や気温が分かるものを準備するなどの環境の工夫も必要だったように思う。

5. 研究の成果

3歳児は、安心できる保育者の存在によって子どもが自分のしたい遊びができるようになり、友達のイメージに共感したり、自分の思いを伝えたりしながら一緒に遊びを楽しむ姿がみられるようになってきている。4歳児は遊びをクラス全体に知らせることで、子どもが興味をもち、一緒に遊びを考えたり、やってみたいと思ったりする姿がある。また、子ども

が考えた時に試せる環境があることや子どもの遊びに共感することで、より遊びの広がりが見られた。5歳児は遊びマップを作ったことで、遊ぶ前に友達同士誘い合う姿がみられたり、お互いに思いを出し合ったりと遊びを進められるようになってきている。

子どもの興味関心をタイミング良くつかみ、環境を整えていき、保育者が声掛けをしてきたことで、子どもの遊びが「おもしろそう」「もっとやってみたい」や「困ったな」「どうしよう」など気づきや発想につながってきた。また、子どもの姿や環境構成を職員間で共通理解していくことで、より遊びが広がり、継続した遊びがみられるようになってきた。

6. 今後の課題

子どもが遊びの楽しさやおもしろさに気づいていくには、遊びの中で、「たのしかった」「またやりたいな」という思いを十分に出せる環境や遊びを積み重ねていく事が大切である。遊びの広がりがみられるようになってきている中で、遊びが思うように継続しなかったり、発展しにくかったりすることがあったので、子どもの楽しんでいることを見極め、楽しさに共感し、寄り添い共に考える保育者の存在が重要であると感じた。また、子どもの思いを引き出し、考えを周りに広げてつなげていくような振り返りの場を持つようにしていきたい。

職員間での話し合いも重要であるので、引き続きそれぞれの視点での遊びや子どもの姿の見取りを出し合い、深めていきたい。